

白玉製の鐔について

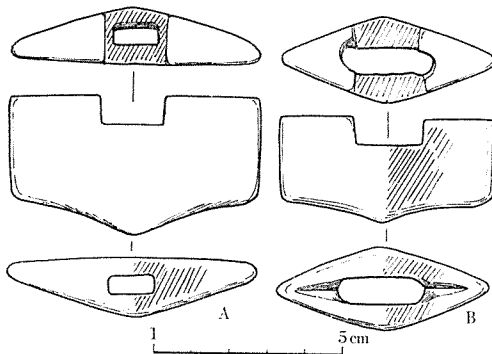
— 文物西漸の一例 —

水 野 清 一

中国人は、古来、玉をたふとび、さまざまな玉器をつくり、吉凶あらゆる儀式に不可欠の礼物とした。このことは、世間にひろく知られてゐる。ところが、戦国から漢時代になると、装身具にもさかんにつかはれ、刀剣の外装にももちひられるやうになった。しかも、なほ玉の靈驗が一般に信じられ、『漢書』王莽傳には、王莽が孔休に玉具の宝剣をすすめる際、美玉が癢をなくすることを述べてゐる。

さういふ秦漢の玉具剣の出土するものはすくなくないが、朝鮮の樂浪第九号墓から出た鉄剣は、もっとも完備してゐる。これには劍首の玉といはれる琿、劍尾の玉といはれる琿はないが、劍室にほどこされる琿や、劍口の鐔が玉でつくられてゐた。琿は鞘(削)わきにあつて、帯のかけはづしを便利にしたものである。

鐔は銅剣ならば同鑄であつた。しかし、同鑄でないものもあつた。玉製も同形で、鞘にむかひ方は山形をしてゐる。柄についた方はコの字形にきりこみがある。また全体は菱形の横断面をとる。両側に藻文、藻文の中心に獸面がある。主として戦国時代につくられ、漢代のものは、おそらく前漢に属するものとおもはれるが、これもほゞ同形である。



ところが、これとおなじものがイランでも発見されてゐる。図示する二例はテヘランにて購入したものであるが、一見して劍口の玉であることが明白である。一方が山形、他方にコの字形のきりこみがあり、横断面は菱形である。さうして茎(なかご)をとほす孔がある。おそらく、その剣といふのは鉄であつたらう。ずるぶん使用され

白玉製の罈について

たとみえ、たいへん摩滅してゐるが、彫文はもとよりなかつたらしい。秦漢のものにくらべると、形がくづれてゐる。しかも、一方、(A)は横断面が菱形をなさず、扁平な三角形である。中国できでなく、イランをふくむ西方できであることはあきらかである。

そのうへ、めづらしいことは白玉、それもコータン産の軟玉でつくられてゐることである。あきらかに中国の罈をまね、その材料までも、同質の白玉をつかって、イランにおいて製作されたものである。

年代のほどは明言できないが、中国で、この種の玉罈がつかはれたのが、戦国、前漢であるから、イランにすればパルティア時代、すなはちアルシャク王朝時代になる。この王朝は安息として、中国人のあひだによく知られてゐるから、パルティアでも、中国のことを、その程度には知つてゐたのである。さうして、コータン輸入の白玉をもつてかういふ中国風の劍罈をつつたのであらう。

これとおなじやうなケースは、円面鏡においてもみとめられる。それは文様から判断すると後漢鏡が、その模本になつたとおもはれる。

(筆者は京大人文科学研究so教授)